



ROTARY CLUB OF CHINO WEEKLY

Rotary CHINO



2015~2016年度国際ロータリーテーマ

茅野ロータリークラブ

創立1981. 1. 26

茅野ロータリークラブ活動指針

「みつめ直そう！ひとりひとりがロータリー」

2015 — 2016 会長 矢崎 敏臣 幹事 加藤 宏治

Vol.07 1629 2015.08.19

会長挨拶

皆さんこんにちは。8月15日は終戦記念日でした。この時期になると否が応でも戦争と平和の事を考えざるを得ません。

先日、下伊那にある満蒙開拓平和記念館へ行ってきました。この記念館は人口約6600人の阿智村にある記念館で、私と同じ不動産鑑定士をしている友人の寺沢秀文さんが専務理事をしており、平成25年4月に開館した平和記念館であります。私も少しですが寄附をさせて頂きました。

この記念館は戦時中策で、旧満洲国に多くの日本人が渡り入植した「満蒙開拓」の資料を収集展示してあります。当時の映像、写真、手紙、資料や住居の模型が展示されており、入植から逃避行、集団自決、収容所の生活、そして中国残留孤児等の負の歴史を目の当たりにし、戦争の悲惨さ、平和の尊さを学ぶことが出来ます。

ここで日本の歴史を振り返ると、昭和6年に満洲事変が勃発し、そこから15年戦争の出発点となります。昭和7年には満洲国建国。満洲への移民については 武装移民から、分村、分郷移民、さらに青少年義勇軍とさまざまな形で終戦間際まで続きます。満洲移民については、私たちの住む長野県が突出した形で行なわれました。

この満蒙開拓は、満洲事変から第2次世界大戦終戦までに、旧満洲に約30万人が入植した国策です。特に長野県は県や教育会の指導や、養蚕・製糸業の不況から全国最多の約33,000人が入植しました。「20町歩(20ha)の地主になれる」との国のスローガン(これを「王道楽土」といったそうですが)が掲げられ大陸に渡りましたが、厳しい自然の中で開墾や敗戦、シベリア残留等を経験し、帰国できたのは3分の1程度と言われています。逃避行の途中で子どもや家族を失い、一部は中国残留孤児となりました。引き揚げ帰国できた人々も荒れ地に居住させられ、県内各地に「満洲開拓殉難の碑」が残されています。私たちの住む諏訪のエリアからは、富士見村から渡った人が最も多く、富士見村と落合村の計約1,000名が参加し、現在の中黒竜江省にそれぞれ村を形成した様です。

富士見村の経済資料によれば、昭和12年のこの村の平均年収は473円で、他県と比べるとかなり低く、平均的な借金は734円位あったそうです。政府は「満蒙開拓義勇軍」を募る際に、奨励金として1世帯当たり1,000円を保証したそうです。当時農林省は「富士見村」を「経済更正指定村」に指定し、その翌年、村議会は分村移民を決定しました。分村移民によって満洲に渡った人は人口4,715人のうち984人と全体の約2割に相当しています。又、長野県立歴史館の企画展の資料によれば、帰還率は幸いなことに富士見村は70.5%となっており、下伊那地区の村は35%~40%前後となっていることから、入植した場所にもよりますが、長野県の下伊那地区に中国残留孤児が多い理由を裏付けます。

最近、この満洲からの引き揚げの状況を題材とした、藤原いさんの「流れる星は生きている」を読み直しましたが、ていさんと3人の子供の引き揚げの壮絶な様子は涙を誘います。皆さんご存知だと思いますが、藤原いさんは諏訪市の出身で、旦那さんは作家の新田次郎さんで、その次男は数学者でありあの「国家の品格」を書かれた藤原正彦さんです。藤原正彦さんもまさに、この満洲からの引き揚げを経験されており、その後の人生のバックボーンとなっている様に思います。

今年は終戦から70年目となります。今 国会で憲法改正について色々論議されていますが、二度と戦争をしてはならないと思います。そのことを考える時、高邁な思想はともかくとして、身近な足もとから見つめ直してみたらどうでしょうか。

幹事報告

※別紙幹事報告書

ニコニコBOX

人数
25人
金額
32,000円

- ◎矢崎敏臣会長 ランディン・ロンダさん、お忙しい中時間を作って頂きありがとうございます。卓話よろしくお願いします。
- ◎柳澤孝男会員 ロンダさん、河西さん、ようこそ！よろしくお願いします。
- ◎北原重信会員 集団疎開組、本日全員帰りました。河西頼子さんお久しぶりです。
- ◎田中淳喜会員 新しいドライバー「R15」買いました。当たりません。
- ◎藤本稔会員 諏訪湖花火大会、素晴らしかったです。
- ◎柳澤幸輝会員 花火大会ご利用ありがとうございました。
- ◎竹村一男会員 「茅野どんぱん」お疲れさまでした。8月7日誕生日です。53歳になりました。昭和37年もこんなに暑かったんでしょうか。

功労バッジ贈呈

RIから矢崎和幸会員に堀江藤夫
新入会員推薦の功労バッジ贈呈



卓話

「自己同一性 (self-identity)
~日本に定住している私の経験~」

Rhonda Lundin (ランディン・ロンダ)さん
(富士見町在住)



外国人にとって「identity」はすごい重要なこと。

出身は、アメリカ中部のミネソタ州。気候はハケ岳と同じで暑いのが2週間くらいで、湿気が少ない。雑木林が多くて紅葉がきれい。冬はほんとに寒くてアメリカの中では一番寒い州。零下50度になることもある。

初めての海外は、1970年に日本に来た。3か月間京都で過ごした。万博にも行った。当時は「外国人」も少なかったので珍しがられて日本の子供たちから芸能人のようにサインを求められたのが印象的だった。

次は1988年に来日。2年間大阪にホームステイし、その間英会話を教えていた。それからアメリカに戻ってノースウェスト航空でパーサーをしていたが、1992年の湾岸戦争で航空不況に陥り、新たな仕事を探していたところ日本から英会話教師の誘いがあったので再度大阪に来た。その後転勤で東京の目黒に移ったが、そこは環七の近くで空気が悪く、育児に良くないので多摩市に移った。普通の公団物件に14年ほど暮らした。子供は日本の保育園、小学校に通って、普通の日本の子供と同じように育った。多摩市は富士見町に「多摩市少年自然の家」があり、よく来ていた。スキーが子供も好きで毎週のように来ていたが、こんなに頻繁に来るのなら富士見に別荘を建てた。子供が中学生になって、富士見のほうがいいだろうと定住した。来るまでは差別されたリジメられたりするのにか心配だったが、そんなことは一切なく、友達もできて、子供はすごい喜んでる。同時に自分は、町民として「広原区」の役員を6年間やっている。ほんとに「広原区民」として生活しているが、「別荘」に暮らしているため「外国人」でない日本人もヨソからの「外人」と呼ばれることもあり、おもしろい。

最近アメリカで話題になっているのは、全米黒人地位向上協会の支部長を務めている「レイチェル・ドレザル」のこと。白人にもかかわらず自分は黒人だと思って活動している。そのことをきっかけに、「自分は誰？」自分にはどういうidentityがあるのか」と考えるようになった。国籍はアメリカで、パスポートもアメリカ。子供にパスポートはアメリカだと説明したら「自分は日本人だ」と思っているの混同した。子供は日本で育ったので「日本人」だと思っている。私は他の国にいったとき、現地人に間違えられることがある。私の父はスウェーデン系のアメリカ人、曾祖父がスウェーデンから日本に移住してきた。母は京都生まれの普通の日本人。アメリカにいたときは「ジャパニーズ・ハーフ」と呼ばれていた。

大学に入った子供が外国人とのディベートで、「外国人」は強く「……われわれ日本人」は弱い、と言っていたのは非常におもしろかった。彼は、外側は「外国人」だが心が「日本人」だと言ったことがある。私の家も外観は「外国」だが内は障子と畳で「日本」。これからもきれいなハケ岳、富士見、諏訪地域に「地球人」として永く住みたいと思うのでよろしくお願いします。

出席報告

会員数 55名
出席 48名
出席率 87%